



TITLE:

Cyberbullying and mental health among Taiwanese high school students: a mixed methods study(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Wang, Chia Wen

CITATION:

Wang, Chia Wen. Cyberbullying and mental health among Taiwanese high school students: a mixed methods study. 京都大学, 2020, 博士(医学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22375>

RIGHT:

Authors should provide a link from the deposited version to the URL of the published article on the journal's website.
1."I felt angry, but I couldn't do anything about it": a qualitative study of cyberbullying among Taiwanese high school students. BMC Public Health 19, 654 (2019) DOI: <https://doi.org/10.1186/s12889-019-7005-9>. 2.Overlap of traditional bullying and cyberbullying and correlates of bullying among Taiwanese adolescents: a cross-sectional study. BMC Public Health 19, 1756 (2019) DOI: <https://doi.org/10.1186/s12889-019-8116-z>

京都大学	博士（医学）	氏名	WANG CHIAWEN
論文題目	Cyberbullying and mental health among Taiwanese high school students: a mixed methods study （台湾の高校生におけるネットいじめとメンタルヘルスに関するミクストメソッド研究）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>近年、スマートフォン利用の急速な拡大に伴って、インターネット（以下、ネット）利用の若年化が急速に進んでいる。しかし、この青少年におけるネット利用の拡大は、同時にソーシャルネットワークサービス（SNS）などの通信手段を介した「ネットいじめ」の土壌ともなり、重要な公衆衛生上の問題として指摘されている。</p> <p>青少年のネットいじめとメンタルヘルスに関する研究の多くは、これまで主に欧米諸国に集中しており、東アジアでの研究はまだ緒に就いたばかりである。台湾でも、青少年におけるスマートフォン利用が拡大しており、ネットいじめが若者の生活やメンタルヘルスに影響している可能性が示唆されるようになったが、実証的な研究はまだ極めて限られている。しかも、研究方法は、台湾に限らず、国際的にも、量的方法あるいは質的方法のいずれか単一の方法だけで行われているものしかなく、最新の方法論であるミクストメソッド mixed methods による研究は行われていない。こうした背景から、本研究では台湾の高校生におけるネットいじめ問題を、質的、量的方法を連続的にかつ統合して使用する、ミクストメソッドを用いて、探求することとした。</p> <p>本研究はミクストメソッドを用いた、2 相からなる研究であり、第1 相では質的調査を行い、その結果を踏まえて質問票を開発し、そして第2 相では、開発した質問票を用いて、量的調査を実施した。</p> <p>第1 相の質的調査では、48 名の高校生の個別インタビューデータの内容を録音し、逐語録を作成後、テーマ分析を行った。参加者の多くが、裏サイトなどによるネットいじめの被害を経験もしくは目撃していた。ネットいじめのタイプには、欧米でも指摘される、悪口や写真掲載以外に、オンライングループからの排除（仲間外し）というアジア的と思われるタイプが存在し、いじめの理由にも、からかい、差別、妬み、報復以外に、ルール破りへの罰という欧米の報告には見られないものが認められた。これらのネットいじめに対しては、匿名であること（anonymity）、公的に晒されること（publicity）、一度ネットに載ると消去不能であること（permanency）、冗談との区別の困難が難しいことなどが問題として語られた。また、ネットいじめに対しては無力感を感じ、コーピングとしては、あえて冗談とみなす、泣き寝入りなど、ほとんどが受け身的、消極的であり、欧米における知見とはかなりの相違が認められた。</p> <p>第2 相の量的調査では、台北市の 67 の高校から 30 校をランダムにサンプリングし、そのうち、参加に同意した 22 校の 1、2 学年から各学年 2 クラスずつをさらにランダムにサンプリングした。そして、選ばれた全生徒 3,270 名に自記式の質問票調査を依頼した結果、2111 名（65%）が回答し、2028 名の有効回答を得た。データは、2 変量解析と多項ロジスティック回帰分析を用いて分析した。その結果、①いじめに関わっている生徒（被害もしくは加害）は、従来型いじめが 13.3%、ネットいじめが 9.9%、両方が 9.4%で、全生徒の約 3 分の 1（32.6%）が何らかのいじめに関わっていること、②従来型いじめに関わっている生徒の約半数（41.5%）がネットいじめに、逆にネットいじめに関わっている生徒の半数（48.7%）が従来型いじめにも関わっていること（被害者もしくは加害者として）、③従来型いじめとネットいじめでは関連するリスク要因が異なること、④いじめられる側、いじめる側、どちらの側の生徒も少なくとも 1 つの</p>			

<p>メンタルヘルス上の問題（重度の心理的苦悩、自傷行為、自殺企図）を経験していること、などが明らかとなった。</p> <p>以上、本研究の結果から、台湾の高校生間におけるネットいじめの頻度や特徴や影響、従来型いじめとの重複、そして、加害側・被害側にかかわらず、いじめとメンタルヘルスの間に強い関連があることが示唆された。本研究の結果は、台湾におけるネットいじめの実情と予防対策の必要性に関する認識を喚起するのみならず、スマートフォン利用の拡大に伴って同様の問題が発生していると考えられる他のアジア諸国にも参考となる知見であると考えられる。</p>
<p>（論文審査の結果の要旨）</p> <p>本研究は、インターネットいじめの特徴、実態、関連要因の探求を目的に、台湾台北市の高校生を対象に実施されたミクストメソッド研究である。</p> <p>第1 相では、48 名の個別面接データの質的分析から、①ネットいじめの経験・目撃の頻度の高さ、②「仲間外し」という欧米にないタイプの存在、③からかい、差別、報復等以外に、「ルール破りへの罰」という欧米にない理由の存在、④匿名性、公的曝し、消去不能性、冗談との区別が困難等の問題、⑤欧米と違い、泣き寝入り等、対処が消極的なことが示唆された。</p> <p>第2 相では、市内全 67 校から選んだ 30 校中、参加に合意した 22 校の 1、2 学年から各学年 2 学級を無作為抽出し、3270 名に自記式質問票調査を依頼した。2028 名（62%）の有効回答から、①いじめ経験（被害/加害）は、従来型 13%、ネットいじめ 10%、両方 9%で、参加生徒の 1/3 に経験があること、②従来型いじめ経験者の 42%にネットいじめの、逆にネットいじめ経験者の 49%に従来型いじめの経験があること、また、多項ロジスティック回帰分析から、③従来型とネットいじめで関連要因が異なること、④被害、加害を問わず、経験者に何らかの深刻な精神保健上の問題があることが示された。</p> <p>以上、本研究は、台湾高校生におけるネットいじめについて、欧米との差異を含めその特徴、頻度、従来型との重複、関連要因、精神保健上の問題など、公衆衛生学上重要な事実を解明した。</p>
<p>したがって、本論文は博士（医学）の学位論文として価値あるものと認める。</p> <p>なお、本学位授与申請者は、令和 2 年 3 月 9 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。</p>